

京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景 (2-2)

—量と質の変様—

赤松 佳奈

はじめに

11・12世紀の遺跡からは他の時期と比べて輸入陶磁器、それも白磁の椀・皿類が出土する傾向が高い。この傾向は全国的なものであり、京都の遺跡から出土する輸入陶磁器もまたこの時期の白磁が一番多い。

前稿では11・12世紀の白磁について検討を行なった(2-1赤松2020)が、その際に、一度の発掘調査で出土した輸入陶磁器の破片数データを例示し、11・12世紀の出土量が総破片数の40%以上あることを確認した(図8)。

この40%以上の内訳は大方白磁であるが、実は12世紀後半に限ると白磁の割合が若干下がる。それは、青白磁や黄釉褐彩盤などの施釉陶器類といったこれまでなかった器種¹⁾が加わることや、13世紀以降に量が増える青磁椀の初現型のものが少数ながらみえはじめることによる。

(2-2)とした本稿では前稿で白磁が膨大な量であったために積み残していたその他の器種—青白磁、施釉陶器を扱う。なお、青磁の椀・皿については、連続性を考慮して13・14世紀を扱う次回に検討する。

本稿の副題は「量と質の変様」であるが、この副題は前回を含む(2)の主要なテーマである。

前回検討した白磁の様相変化は簡単にま

とめると「量の爆発的な増加と器形の簡素化」と言える。

本稿が主に扱うのは、青白磁などがみえはじめる12世紀中葉以降で、検討の結果この段階にも白磁の様相変化に匹敵するような変化がみえた。その詳細について以下具体的に整理・検討する。

12世紀中葉以降にみえる変化

器種・器形の再多様化

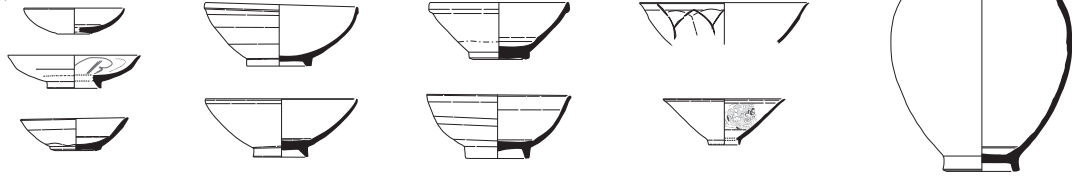
12世紀後半にみえはじめる青白磁、施

中国時代区分	時代区分	土師器の段階区分と略年代
宋 金 南宋 鎌倉時代 元 南北朝	平安時代	1020 A
		1050 B
		1080 C
		1110 A
		1140 B
		1170 A
	鎌倉時代	1200 B
		1230 C
		1260 A
		1290 B
		1320 C
		1350 C

図1 京都出土土師器の時期区分と年代観
平尾2019を引用・追記

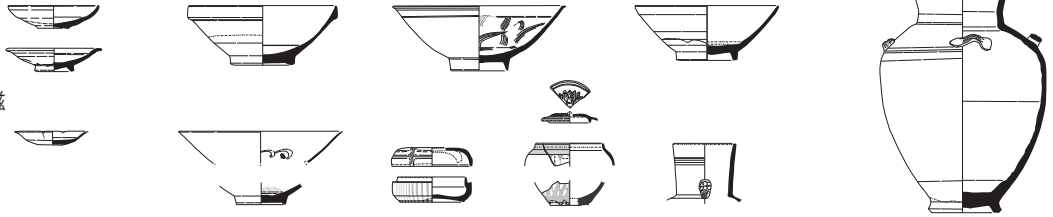
11・12 世紀前半の主な器種・器形

白磁

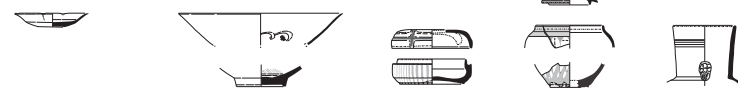


12 世紀後半の主な器種・器形

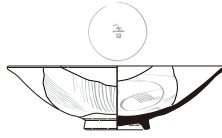
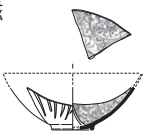
白磁



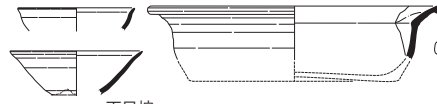
青白磁



青磁

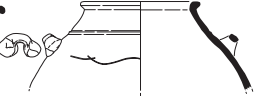


施釉陶器類



天目椀

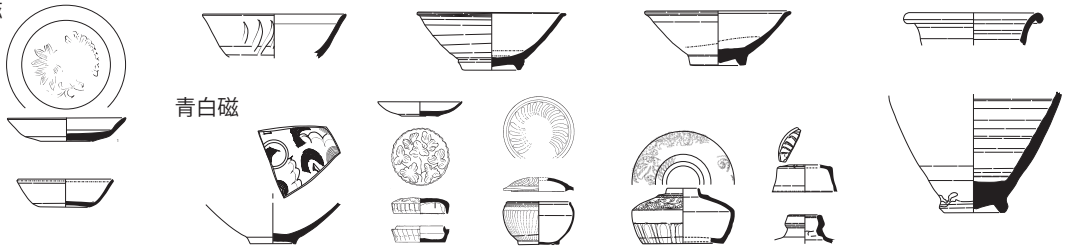
黄釉褐彩盤



褐釉陶器壺

13 世紀の主な器種・器形

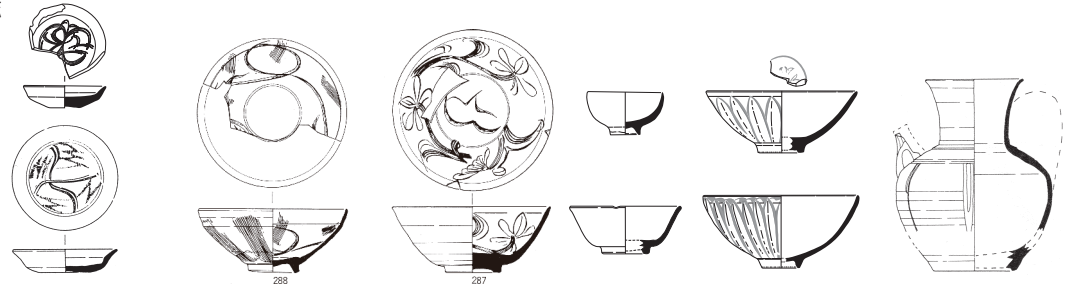
白磁



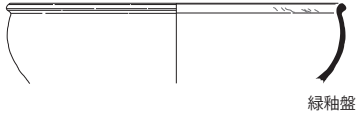
青白磁



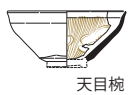
青磁



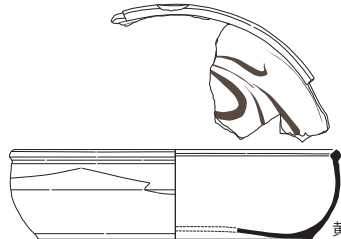
施釉陶器類



緑釉盤



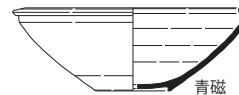
天目椀



黄釉褐彩盤



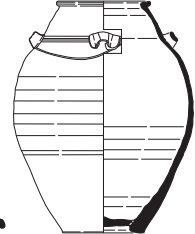
褐釉陶器



青磁



黄釉系



青磁

図2 11～13世紀の主な器種・器形の比較 (1:8)

1:8

釉陶器、青磁は、器形の種類を増しながら13世紀代に最も多様化し、14世紀代は量が減るものの前半の資料までは断絶なく出土する。

中でも施釉陶器は特に多様で、精製品としての黒釉陶器椀（所謂天目椀、以下必要に応じて天目椀とする）や磁州窯系の壺ほか、黄釉褐彩盤の類も一定量確認できる。

粗製品にはコンテナ容器と称される雑器の壺がある。

青磁は椀類が少量と粗製の越州窯系青磁に似た壺や鉢がある。このうち粗製品の壺・鉢類は本稿の対象とする。

白磁も含めた12世紀代の器種では青白磁が最も精巧な作りをしており、当該期の優品であったと推測される。なお、合子類については紀年銘資料を伴う経塚出土資料からも12世紀代には輸入されていたことが確認できる（赤松2021）。

12世紀後半台に確認できる新しい器は青白磁の椀・皿・合子・壺、黄釉褐彩盤、天目椀、褐釉陶器壺、青磁椀、磁州窯系壺（現時点では良い図化資料が無い）などがある（図2）。

合子や盤といった器形は11世紀代にはほとんど見ない²⁾から陶磁器の種類だけではなく、器形の種類についても13世紀に先立ってこの段階で再多様化がはじまったと評価できる。なお「再」多様化したのは、9・10世紀の陶磁器は全体量は少ないが器形の種類が多いためである（図9）。

12世紀末から13世紀初頭は、それまで多量にあった白磁椀・皿に替わって青磁の椀・皿類が供膳具の主流をなす時期であり、輸入陶磁史上の画期であるが、今回検

討する変化は、白磁から青磁への転換という大きな流れの陰になってこれまで見過ごされてきた別の流れであり、青磁への転換とは必ずしも一致しないようにみえる。

改めて青白磁や施釉陶器類を中心に検討した結果みえたものであり、12世紀中葉にみえはじめ、13世紀代をピークとして14世紀前半までは連続した流れの中に位置付けられるものである。

そのため、主流の青磁に先行する形になるが、本稿では12世紀後半から14世紀前半までの上記の器種について整理し、あわせて11・12世紀に起きた二度の変様について検討したい。

器種別概要

青白磁（図4・5）

12世紀中葉の青白磁は、精製品がわずかしかなかった11・12世紀に再び現れる優品で12世紀代は希少品とも言える。白く薄い器壁に青みのある透明釉がかかり、12・13世紀のものは生産地中国でも珍重され（徐波・徳留2015）、「影青」とも呼ばれる。精製品は主に景德鎮窯産である。

京都で出土する初期のものは釉調の青味

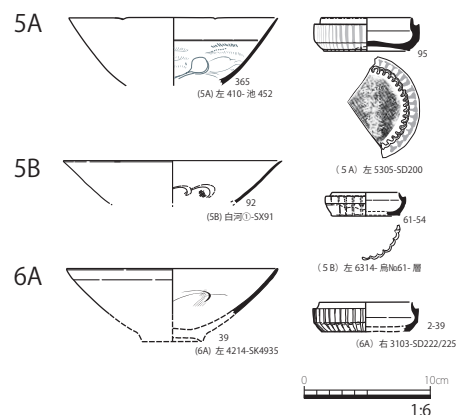


図3 初期青白磁の連続性

が薄いため白磁に見えるが、図3のように次の段階に型式学的な連続性をもってつながるものを初期の青白磁と本稿では位置付ける。釉薬の青味は時期が下がるにつれて強くなる傾向にあるので初期のものが白いのは型式学的な発展の観点から考えても無理がない。胎土の良好さ³⁾が薄い器壁を可能にしていると考えられるため、白くて薄い器壁が白磁と青白磁の線引きの指標の一つとなるが、12世紀代の出土品は同じ中国の他窯製品と比較した時に器形の類似性が高いため、白磁と呼称しても問題はない。なお13世紀代になると特産化していくためか、青味のある釉薬が完成されていくためか、合子の文様などが精緻なものになり薄い器壁と青味がかった透明釉がより美しく見えるような印文に発展していく傾向にある。京都出土のものが全て景德鎮窯産かは不明だが、観察できる限りでは12世紀代のもは胎土や釉調が一括りにできる程度似ており、かつ精製品である。肉眼で識別できる青白磁合子の模造品が出土するのは13世紀以降である。

青白磁と捉えられる椀や合子などの最も古い出土例は現時点では5A段階（西暦約1110～1140年、以下西暦約を省略）の土師器に共伴する。数量が多いのは6A（1170～1200年）～7A（1290～1320年）段階で7C（1350～1380年）段階までは出土が追える。時期が下がるにつれ印文が精緻になる。

出土器形は椀・皿・合子・壺類がある。珍しいものとして托、用途不明の六角形の器台形製品などがある。14世紀代は小型製品に文房具類と類推される器形がある。

椀は直口のものと同外反するものがあり、輪花意匠が付加されることもある。高台は断面三角形で体部は直線的に伸びる、所謂斗笠椀である。中国には腰が張って体部に丸みを帯びた椀⁴⁾の例があるが、現時点の京都では出土例を見つけれなかった。所謂斗笠椀は12世紀代～13世紀前半は出土するが13世紀後半以降は見ない。

斗笠椀とは異なる形の椀は、良好な土師器資料を伴わないものの13世紀後半と推測される椀が1点出土しており（図11-勝持寺-104）、口縁部は釉剥ぎ、体部は湾曲すると推測される。同時期の所謂口禿白磁椀と類似している。量は少ない。

皿は口径10cm未満の小皿が最も多い。器壁が薄く口径6cm～8cm、口縁端部外反のものは輪花形が多い。白い堆線のあるものもないものがある。13世紀後半以降は口径が5～6cm程度まで縮小し内面に印文がつくことが多い。

合子は、京都では青白磁の中で最も出土数の多い器形である。多様な形をしているが大きく分けると、平形合子と壺形合子がある。

平形合子は平面系が円形、花形、多角形などある。青白磁の合子として特に象徴的な細かい花文が蓋天井部に施される合子（図10-弁天島-5）は6A段階から出土がみえる。量産化後の器形と考えている。12世紀段階のものには底部に「□家合子記」と陽刻の印が押されたものがある。京都市出土例は現時点でいずれも「李」家であるが中国では「楊」家や「陳」家なども見つかっている（馮1984）。13世紀中頃には平形合子に輪高台のつくものが現れる。

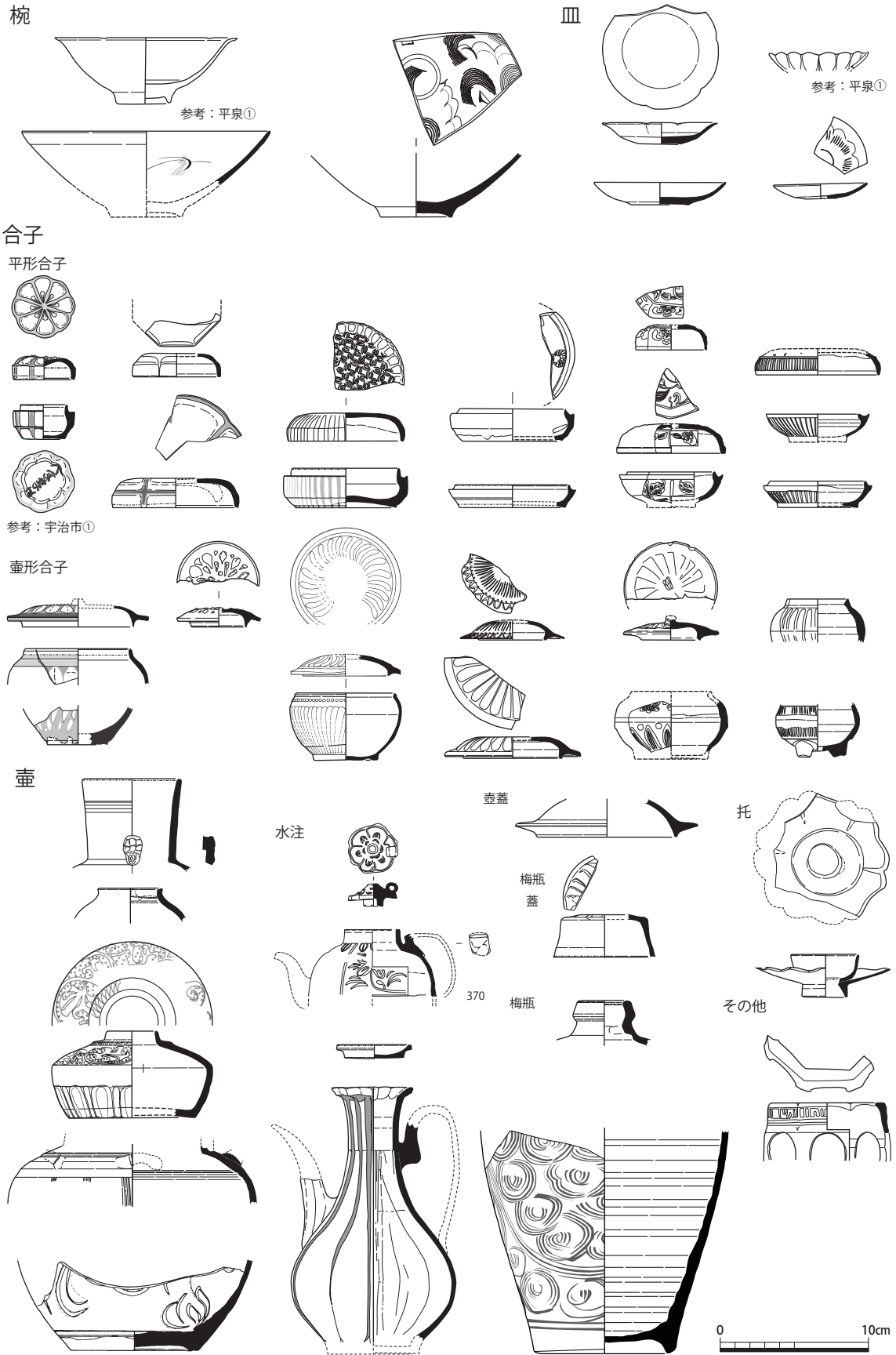


図4 出土青白磁の器形の種類 (1:4)

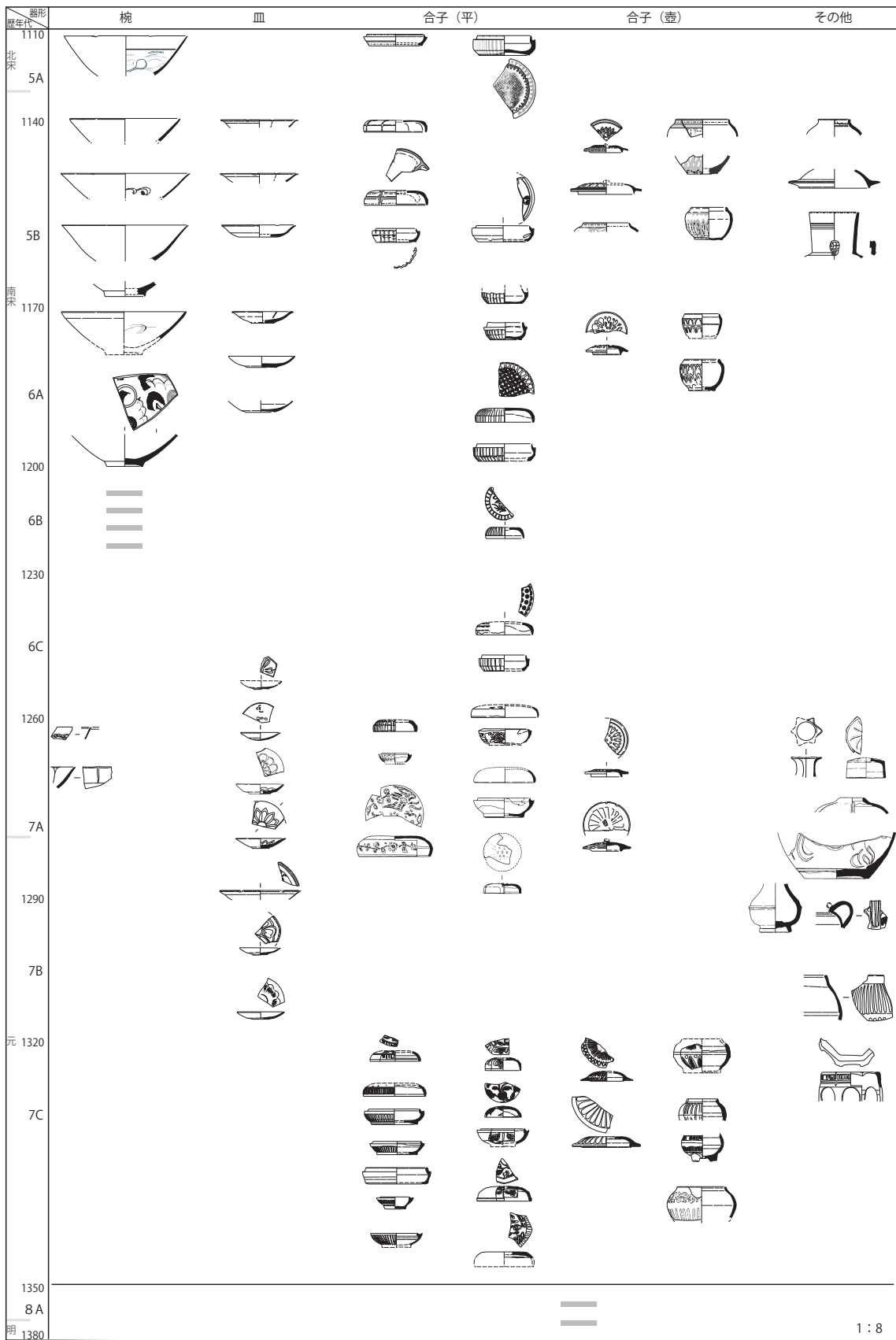


図5 青白磁の変化と廃棄年代 (1 : 8)

壺形合子にはカエリの付いた蓋が付く。小型の蓋付き壺であるが慣例に従い壺形合子とする。12世紀後半代から14世紀まで出土する。時期が下がると肩部と胴下半部に別の文様が付くようになる(図11-烏No.80-79)。

壺類は、壺、水注、所謂梅瓶などがある。壺には小型のものと大型のものがある。出土例はいずれも細片が多く図化可能な資料は少ないが、口縁部が直口でひらいたもの、真っすぐに伸びるものがある。胴部の意匠が瓜稜型になるものもある。水注は小型で型押し文様が付くものと大型のものがある。瓜稜型の胴部破片は水注の場合もある。右京二条二坊十一町跡から出土した水注は(図12-右2211)口縁部が花形をしている。13世紀後半以降の優品であるが出土例はこの1例のみである。

その他13世紀代に特徴的な器として梅瓶がある。蓋の出土例には他窯産のものもある。青白磁の梅瓶には雲文の入った体部片などが小数出土しているが図化できる資料はあまりなく詳細は不明である。時代が下がると寸胴気味の胴下半部が細くくびれたものになる傾向にあるが出土例の増加を待ちたい。

托は1例しか出土していない。中空になっており皿部は花卉をかたどっている。

その他精製品

黒釉・褐釉陶器碗

所謂天目碗の最も古いものは12世紀後半代にみられる。出土量は少ない。烏丸線の出土例が現時点では最古の例だが、所謂スポン口のものと同様に直線的に開く朝顔形の碗(所謂斗笠碗)がある。天目碗の集成と

形態の変化については陳彦如氏がまとめている(陳2019)。

近年新出の資料に金彩文字天目と吉州窯系の玳瑁天目がある。

施釉陶器類

黄釉褐彩盤・鉢

黄釉褐彩盤と同じ胎土・釉調の焼物(以下黄釉陶器あるいは施釉陶器)には盤のほかには鉢がある(図14-上京-26-29)。この盤は中国では「洗」と呼ばれる一般的な器形で磁器類の窯をはじめ生産していた窯は多数あったと考えられる。京都出土のものは他に緑釉陶器盤がある。

破片資料がほとんどで、詳細を明らかにするのは難しいが、黄釉陶器口縁部の形態は少なくとも4種ある。盤の口縁部は図6の1・2で外反しながら長く伸び端部がやや肥厚するものが古いが、口縁部が折り曲げられて断面四角形(図6の3)になったものとも共伴するので、口縁部形態を時期の指標にするのは難しい。

底部内面から胴部にかけて、黄色・淡い褐色・濃い褐色の釉薬と線彫りを組み合わせて草花文などの文様が描かれることが多い。まれに無文もある。

時期は5B段階(1140~1170年)には出土例があるが、とくに口縁部が巻かないものは福岡の出土例からもう少し遡ると考えられる。

細片での出土が多く、図化されないことも多いが13世紀代には一定量出土する。口径も一定ではなく、小型のものから大型のものまであり法量分化があったと推定される。出土の終焉をどこにおくかは明確ではないが7段階(14世紀前半)までは出土

しても不思議ではない。7A段階までは良好な出土例が追える。

鉢は口縁部上端が肥厚し、断面形が楕円あるいは上端が平らな三角形をしているも

のを現時点で鉢とする。底部まで残存する資料は1点しかないが深めの器形である。

小型のものと大型のものがある。後述するが小型の鉢には同じような形態で青磁⁶⁾も

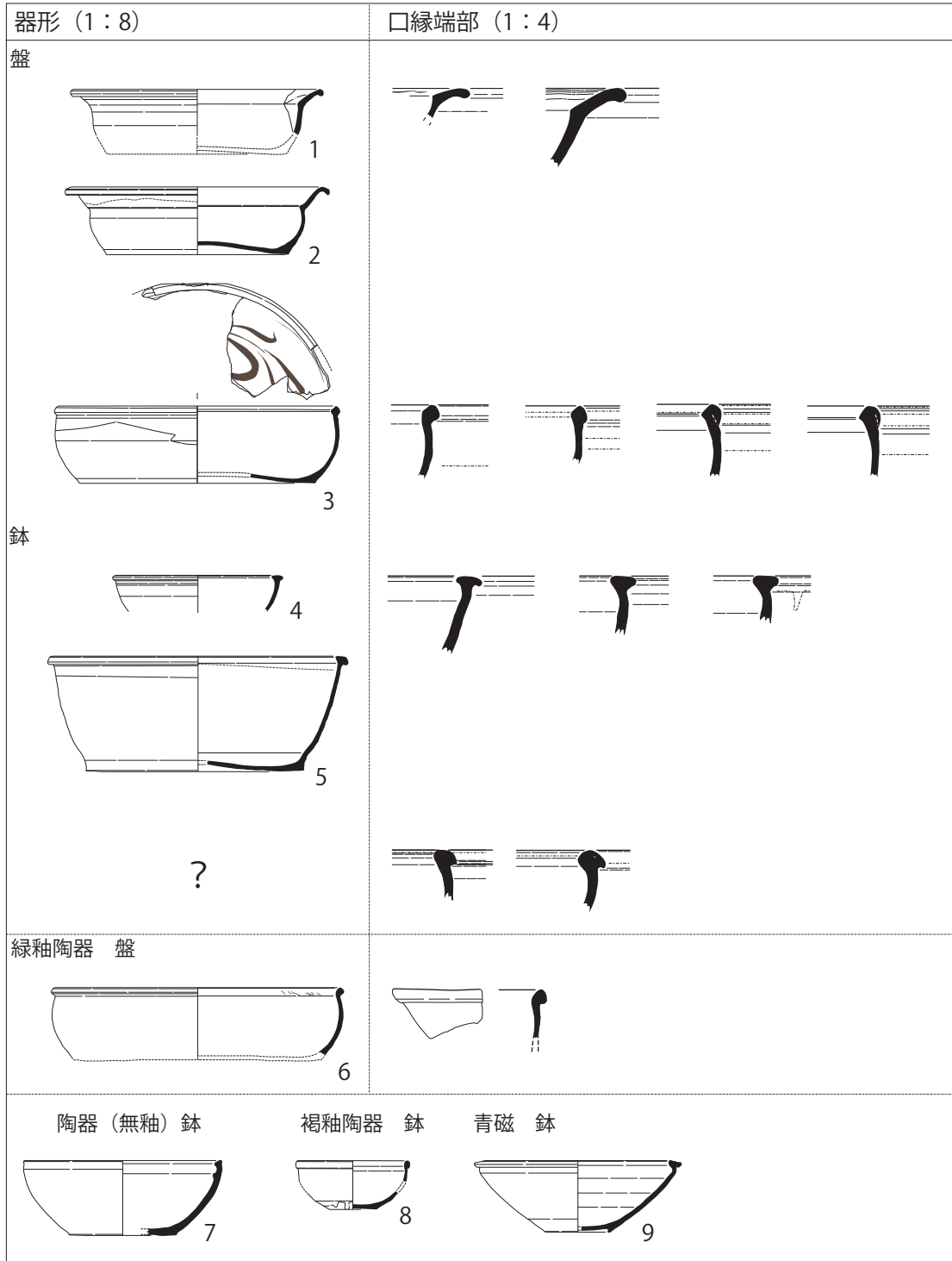
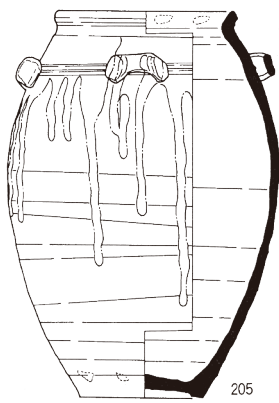
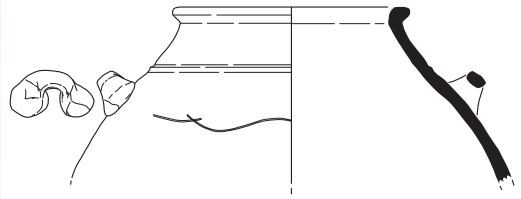


図6 施釉陶器の器形と口縁端部

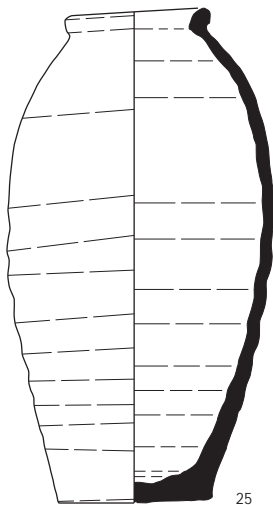


205

化野 - 火葬墓

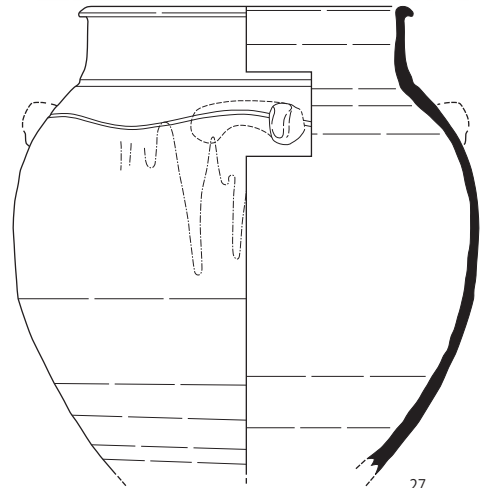


(5B) 白河街区 - SX91 172



25

上京遺跡 - 土坑 268

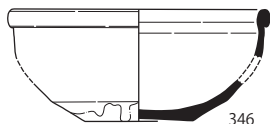


27

上京遺跡 - 土坑 268

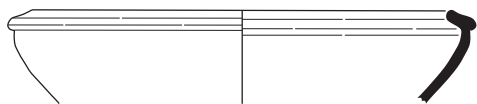
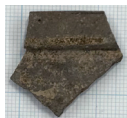


左 8402- 未



346

(6B) 左 3210- 井戸 1197



343

(6B) 左 3210- 井戸 1197



図7 雑器の壺の多様性

ある。中国では一般的な雑器の一種であると推測される。

この他このグループには粗い砂粒が多量に入る胎土の特徴がよく似た無釉の鉢（底部内面が摩耗している。こね鉢か）がある（図6の7）。口縁部内面に2段の稜を持つのが特徴で、図化された資料は少ないが口縁部の細片は出土することもある。

緑釉陶器盤

鉛釉の緑釉陶器の盤は、黄釉褐彩盤と同時期に出土する盤の一種である。形態は同じようなプロポーションをしているため、当初、黄釉褐彩盤の釉薬を掛け分けたものかと思っていたが、黄釉褐彩盤よりも扁平（径高指数が低くなる）な傾向があり、口縁部の肥厚が少し丸みを帯びること、底部の文様が線刻など細かな特徴が異なる点から釉薬を掛け分けているだけでは無いと考えるに至った。ただし胎土は黄釉陶器と類似する。緑釉陶器の出土例は盤のほか、量はかなり少ないが粗製の壺がある。

また1点のみ精製品の椀が左京八条三坊四・五町跡1区土坑137から出土している。内面に花文がある（図16左830405）。

磁州窯系壺類

磁州窯系の壺類も破片資料では出土している。白地黒花の壺類や緑釉の壺類が出土しているが数は多くない。現時点では良い図化資料がないため将来、集成したいと考えている。

雑器 鉢・壺類

青磁・褐釉陶器 鉢

青磁・褐釉陶器の鉢も少量だが出土する。これらは雑器壺類と同じ胎土や釉調のため、まとめて輸入されたものと考えら

れる。つまり雑器には壺・鉢があり、器種は粗製の青磁・褐釉陶器・黄釉陶器・灰釉陶器・無釉あるいは褐釉・灰釉が肩部に垂れている陶器がある。

その他壺類

雑器の壺類はコンテナ容器（横田・森田1978、山本2000）と考えられている。もう一度器種を整理すると、青磁・褐釉陶器・灰釉陶器・無釉陶器がある。形態は様々あるが多いのは図17の長岡1415-57、左830405-148などである。耳無、双耳壺、四耳壺などある。壺については破片資料が多く全体像をつかめきれなかった。将来的に壺だけを集成し稿を改めたい。

量と質の変様

11・12世紀の様相

本稿では当初の予定を逸脱し12世紀中葉から14世紀前半までの青白磁や施釉陶器類について整理したが、本来（2）で取り扱う予定だった時期は11・12世紀の土師器に共伴する資料であった。「量と質の変様」という副題は、11・12世紀の輸入陶磁器の特徴が「膨大な量の白磁椀・皿類」であったため考えたもので、9世紀代との比較によって簡素な組成についても言及できないかと考えていた。

（2-1）で提示した内容をまとめると、①9～17世紀の内、最も多くの輸入陶磁器が出土する時期は11・12世紀で、その比率は40%以上となる（図8）。

②他の時期を圧倒するほど多量に出土するが、整理してみると実は簡素な様相をしている。白磁が大方で、器形のバリエー

ションは、大きく分類すると椀2種・皿2種・壺・水注に集約され、9世紀代の輸入陶磁器と比較すると、かなり絞り込まれた組成と評価できる、というものであった。

なお、出土器種の大方が白磁という現象をとっても、9・10世紀代とも13世紀以降とも異なることが指摘できる(図9)。11・12世紀の中国では耀州窯青磁や雑器の青磁・施釉陶器類など他器種も前代と変わらず生産されているから、この時期日本は選択的に白磁ばかり輸入していたと考えられる。

また、質の上でも9・10世紀代には中国の紀年銘墓で出土する輸入陶磁器と同等の質の資料が確認できたが(赤松2020)、11から12世紀前半は極少量の遺物をのぞいては高品質のものが出土しなくなる。

再び高品質の陶磁器が出土するようになるのは、今回整理した12世紀の中頃であり、特に12世紀代の青白磁は品質の高いものが多い。

時期別様相の変化

もう少し詳しく器種・器形のバリエー

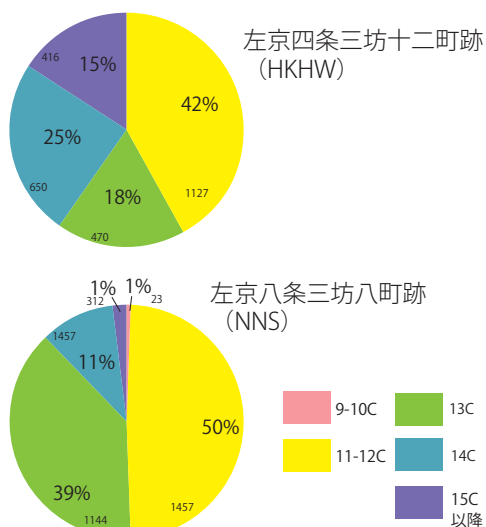


図8 時期別の破片数

ションと量の関係を整理すると図9のようになる。

9・10世紀前半は時期別割合にすると量は多くはないが、ある程度は出土量があり、青磁には粗製品と精製品がある。白磁は比較的精製品⁶⁾の印象が強い。輸花意匠のつく青磁や白磁などには中国の墓碑を伴う墓から出土した資料に遜色ない精製品がある。合子・唾壺・托・香炉などの多様な器形ほか椀・皿にも複数の器形があり、他の時代と比較すると少量(図では並と表現)だが多器形・かなりの高品質の資料も含む精粗混合といった様相をしている。

10世紀後半は量が少ない。また10世紀前半代に遡る可能性があるやや古い型式のものが出土することもあるため様相がはっきりしない。変化がみえ始めるのは10世紀末で11世紀の前半までは、11世紀後半と比較すればやや高品質な白磁が少量みえる。量・器形の種類とも少ない。

11世紀後半から12世紀は先述の通り膨大な量がある。しかも12世紀前半までは大方が白磁で、わずかな例外をのぞき器形は椀・皿・壺に限られる。多量・1器種・簡素な器形の組成で高品質なものはわずかである。

12世紀後半は、白磁以外のものが少数みえはじめる時期である。図9では器種・器形の多様化を表現したため多様にみえるが、出土資料の実態は大方が白磁の椀・皿類である。多量・高品質のものも少量含む精粗混合・器形の多様化がみえはじめる様相といえよう。

13世紀については次回まとめる予定であるが、多量・多器種・多器形である。

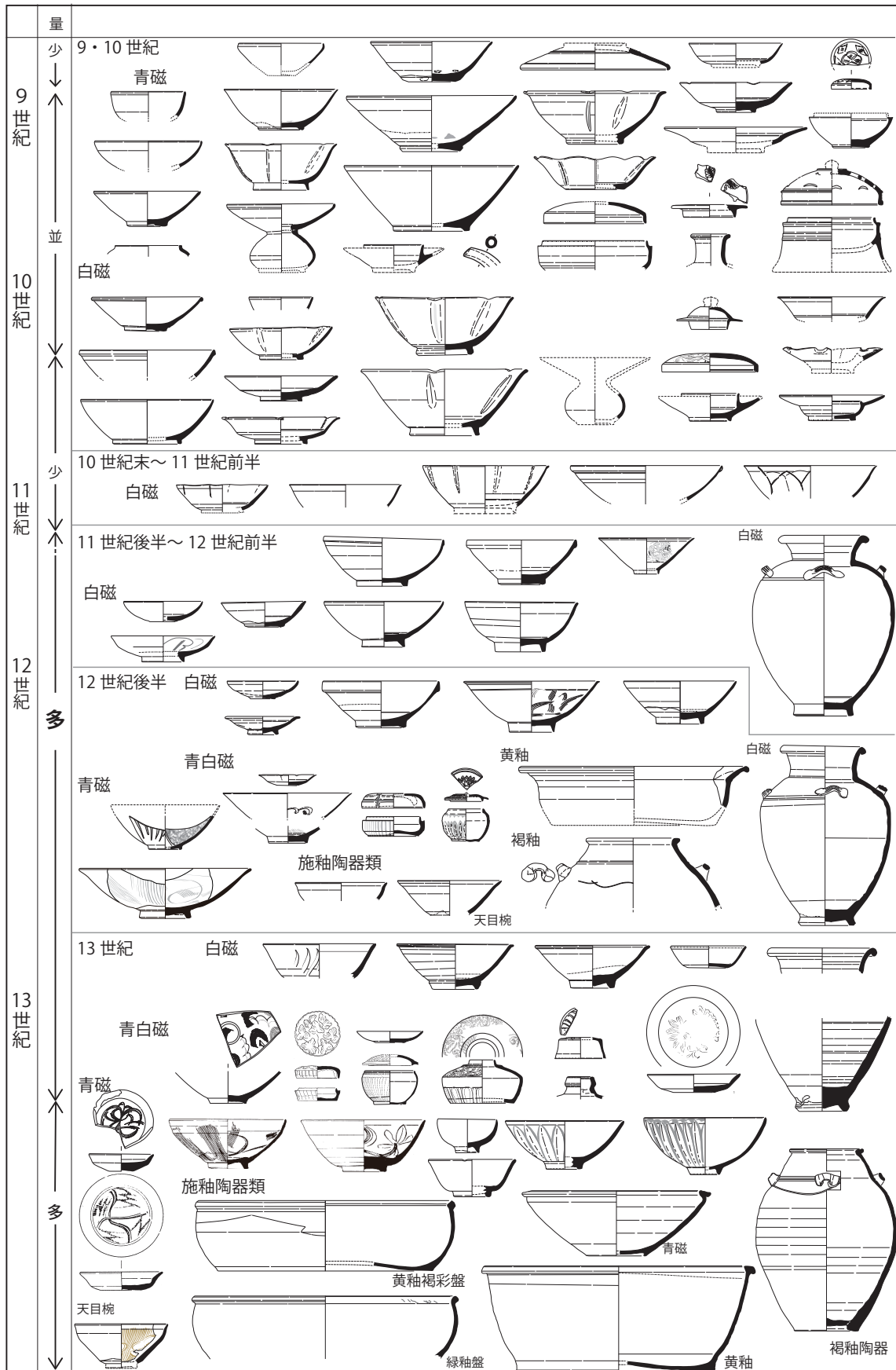


図9 9～13世紀の輸入陶磁器の様相と出土量 (1:8)

こうして整理してみると、白磁椀・皿・壺類が膨大な量輸入された11世紀後半から12世紀前半は、やはり特異な様相をしている時期であるということがわかる。

平安時代の貿易制度

平安時代の貿易像研究としては森克己氏の『日宋貿易の研究』(森1948)が著名だが70年以上前の論文であり、1990年代以降様々な観点から森説に対する見直しが進められた。特に10世紀以降の「鎖国的」な政策による密貿易や、その後西嶋定生氏が東アジア世界論として示した秩序機構の欠落による私貿易(西嶋2000)などの考えに対しては、そのような実態はなかったという的確な批判が行われており、王権と対外海上交易には密接な関係があったと指摘される(山内2003)。現在では12世紀前半までの貿易は管理制度化にあったという考えが主流である(山内2003、榎本2007、渡邊2012)。また管理制度終焉の契機として12世紀代は寺社・権門が博多綱首に資本を委託して貿易船を中国に派遣し帰朝後貿易利益が配分される貿易経営が行われていたことなどが明らかになっている(榎本2007)。

本稿で捉えた量・質の変様の背景にはこうした平安時代の貿易管理制度とその変化による影響があったと考えられる。

そこで、論じられた制度変化が本稿で捉えた輸入陶磁器の様相変化に合い、理解の助けとなりそうな渡邊誠氏の『平安時代貿易管理制度史の研究』(渡邊2012)を引用し、背景についても若干の考察したい。

渡邊氏の研究を基に平安時代の貿易制度を簡単にまとめると、

・9世紀前半：新羅海商の活躍による貿易体制、天長8年(831)に貿易管理規定を整備、海商の来航は到着地の府国から中央政府に報告、勅裁に基づいて海商を客館に「安置供給」。官の舶載品先買権と民間貿易の管理を明確化。

・承和8年(841)に新羅海商を組織化していた張宝高の滅亡。新羅人への排外意識や東アジア情勢の中9世紀中頃から唐海商との貿易に切り替える。

・9世紀後半：貿易管理規定による管理貿易継続。貿易船の積荷のうちまず「適用之物」を大宰府が選別した上で京進し、残った「不適之物」を府官検察のもと、沽価を守って広く交易させるとされた。官の先買権の履行は、大蔵省・内蔵寮の本官である唐物使が担当した。実例を見る限り10世紀代には唐物使が基本派遣される。

なお、9世紀後半には院宮王臣家が海商の下に使者を派遣し官司先買権を犯してまで競って唐物を求め、価格を高騰させ問題視されることもあった(『日本三代実録』仁和元年(885)十月廿日条、『類聚三代格』卷19・禁制事・延喜三年(903)八月一日太政官符)。

・延喜11年(911)に「年紀」制度制定。海商に対する来航制限規定で、海商は規定年数を経過しなければ「安置」を認められないことになった。その期間約10年。「年紀」制度は財政的見地から朝廷が海商との取引回数を絞りこむことを第一義的な目的として制定されたもので、同じく財政的見地から「供給」も規模が縮小された。「供給」の限度額を超過する滞在費を自弁する必要性が生まれた海商は、朝廷との交易予

定品を申告した残りの物品を来着当初から交易することが認められている。なお年紀違反者については「廻却」処分が下ったが、交易は可能であった。

・「年紀」制度の影響により、10世紀末から11世紀代には海商の長期滞在が確認されるようになる。この頃の鴻臚館は海商を一般人から隔離するような閉鎖性を払拭し、官民の貿易センターとして海商が長期滞在して世帯を構え生活も営む営業拠点となった。「唐房」の祖型がここにあった。

・11世紀中葉に鴻臚館が廃絶する。12世紀には博多に「唐房」が成立し、住蕃貿易(亀井1986)へ。

・12世紀前半頃貿易管理制度が終焉する。その要因は12世紀前半頃になると日本の寺社権門が博多綱首に資本を出資して宋に貿易船を派遣し、帰朝後に利益配分を受ける形態がとられはじめ、新たな貿易形態が出現するためと考えられる。

以上のようになる。

様相変化とその背景

こうした貿易制度の変化に対し、本稿で捉えた様相変化は二つである。

一つは質(様相)の変化で、9・10世紀前半の多様な様相から11・12世紀前半までの簡素な様相への変化、そして12世紀中頃以降13世紀代に再多様化すること。

もう一つは量の変化で、11世紀後半以降12世紀にかけて爆発的に増加し、以後13世紀代は多量にみえることである。

変化の背景を類推する上で、考古学的知見からは、簡素な時期は当然ながら、多様な時期、平安前期の中で特に多様な9世紀代、再多様化する12世紀中葉以降、そし

て最も多様な13世紀以降においても、京都出土資料の様相は同時代の中国の流行とは必ずしも一致せず、そこには輸入する側の選択が働いていたと指摘できる。

つまり多様化・簡素化・再多様化の流れは輸入する側の選択であり、とくに白磁の椀・皿・壺だけが多量にある様相は、同時期の中国で青磁や施釉陶器が生産されていたことを考えれば絞り込んだ選択といえる。それと対比的に9・10世紀代そして12世紀中葉以降の精製品は、量は全体からすれば少量だが、同時代の中国の紀年銘墓から出土する資料と同等の質の器もあり、入手には財力だけではなく教養・流行に対する感受性などが必要であったと考えられる。

とすれば、例えば『日本三代実録』などの記述から9世紀後半に院宮王臣家が海商の下に使者を派遣し競って唐物を求めたことや、12世紀前半頃に寺社権門が博多綱首に資本を出資して貿易船を派遣するようになったという史学研究の理解は、この変化の背景の手がかりとなるかもしれない。

11世紀代の簡素化については、その背景を探ることが難しいが、量の増加と時期が一致することや、11世紀代には中国陶磁に対する価値観が前時代とは変わっていた可能性—それは、藤原道長が金峯山寺に造営した経塚の伝世品に輸入陶磁器を見ないこと、藤原頼道邸である「高陽院」跡の発掘調査では当該期の池が調査されているが輸入陶磁器は細片の白磁椀類が少しと型式学的にやや古くなる壺が1点出土しているのみであること、『源氏物語』第6帖「末摘花」文中の越州窯青磁を指す「秘色」が

末摘花の流行遅れの持ち物を表す描写として書かれていることなどから推測される一などが考えられる。

「唐坊」が成立した博多に多量の白磁が集積されていたことは既に博多の調査成果から明らかになっている（大庭1999・2001ほか）。

量の増加と簡素化がみえる時期には、京都のみならず日本全体に多量の輸入陶磁器があったことは出土資料から明らかであるから、それだけの輸入品を日本国内で集積できる場所が必要と考えられ、「唐坊」の成立時期と多量化の時期の一致は偶然とは思えない。そしてこの時期、海商の交易相手が階層の下方に広く開かれた可能性あるという指摘は、様々な階層が集住していた平安京の各条坊跡から白磁が出土する状況からも理解しやすい。

まとめ

本稿を含む(2)では、(2-1)で11・12世紀には膨大な量の白磁が輸入されたが器形の種類は簡素であることを、(2-2)では12世紀中頃以降には白磁の他に青白磁・施釉陶器類・初期青磁などの器種や椀・皿ではない器形がみえ始め、その多様化の流れが14世紀前半まで連続的に続

いていることを論じた。

またこの結果みえた「量と質の変様」は、平安時代の貿易制度、12世紀以降の貿易体制を反映している可能性についても考察した。

今回提示した青白磁や施釉陶器類の量が最も多くなるのは13世紀である。この時期は主流の椀・皿類が白磁から青磁に転換する大きな画期である。本流に先行する形になったが、検証も含めて次回課題とすべきことは多い。

謝辞

本稿を執筆にあたり以下の皆様・機関にはお世話になりました。記して感謝の意を表します。

上村和直、大立目一、尾野善裕、小池智美、児玉光代、佐藤隆、高橋潔、陳彦如、徳留大輔、新田和央、平尾政幸、劉海宇、山本雅和、吉川義彦。

岩手大学平泉文化研究センター、宇治市歴史まちづくり推進課、株式会社イビソク、関西文化財調査会、公益財団法人元興寺文化財研究所、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、古代文化調査会、平泉町教育委員会

また、京都市埋蔵文化財研究所、関西文化財調査会、元興寺文化財研究所、平尾政幸氏に図データの提供をいただきました。

あかまつ かな (文化財保護課 文化財保護技師 (埋蔵文化財担当))
赤松 佳奈

註

- 1) 本稿では焼き物の種類(白磁、青磁、施釉陶器等)を器種、器の形(椀・皿・壺等)を器形、その種類は器形の種類とする。
- 2) 白磁の合子が数点出土している。
- 3) 景德鎮窯特有の白い胎土は「白木子」と呼ばれる磁土を使用しており、この胎土が取れる

高嶺山がカオリンの語源であるという。佐藤雅彦1978『中国陶磁史』平凡社

- 4) 浙江省海寧県博物館
所蔵 高足椀▷
『中国陶瓷全集16
宋元青白磁』中国上



- 海人民美術出版社、株式会社美の美
- 5) 古くは漢代の金属器や陶器で確認出来る器形。毛利光俊彦2004『古代東アジアの金属製容器Ⅰ』奈良文化財研究所資料68 独立行政法人奈良文化財研究所。
- 6) 邢窯系・定窯系など北方窯産の可能性のあるものも多い。

図版出典・データ出典

図4：参考・引用

平泉①：平泉町教育委員会2001『平泉遺跡群発掘調査略報－柳之御所跡第53・54次－』（第77集）：井戸出土図を引用。

宇治市①：八木隆久・杉本 宏1987「宇治市善法古墓の鏡と輸入陶磁器」『京都府埋蔵文化財情報』第23号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター。

図は筆者実測

図8：破片データ

HKHW：『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-26財団法人京都市埋蔵文化財研究所

NNS：『平安京左京八条三坊八町跡・東本願寺前古墓群』関西文化財調査会2020

引用・参考文献

- 赤松佳奈2020「京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景（1）－平安時代前・中期の文化人が憧れたものは何か－」『京都市文化財保護課研究紀要』第3号、京都市文化市民局文化財保護課
- 赤松佳奈2021「京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景（2-1）-白磁分類への問題提起」『京都市文化財保護

課研究紀要』第4号、京都市文化市民局文化財保護課

赤松佳奈2022「青白磁の受容からみた京都と平泉」『岩手大学平泉文化研究センター年報』第10集、岩手大学平泉文化研究センター

榎本渉2007「宋代の『日本商人』の再検討」『東アジア海域と日中交流一九～十四世紀』吉川弘文館

大津透2015「財政の再編と宮廷社会」『岩波講座 日本歴史』第5巻 古代5、岩波書店

大庭康時1999「集散地遺跡としての博多」『日本史研究』448

大庭康時2001「博多綱首の時代」『歴史学研究』756

亀井明德1986『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎

徐波・徳留大輔2015「山東地域における中国南方産陶磁器の流通に関する研究（その1）-宋墓に副葬された事例を中心に-」『岩手大学平泉文化研究センター年報』第3号。

玉井力1995「(通史) 一〇—一一世紀の日本—摂関政治」『岩波講座 日本通史』6 古代5、岩波書店

陳彦如2019「天目椀から見た中世日本における喫茶文化の世俗化」京都大学大学院人間・環境学研究科 学位論文

平尾政幸2019「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

西嶋定生2000『古代東アジア世界と日本』李成市編、岩波書店

馮先銘1984「解説 宋元青白磁」『中国陶

- 瓷全集 16 『宋元白磁』上海人民美術出版社・株式会社美之美
- 山内晋次 2003 「中国海商と王朝国家」『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館
- 山本信夫 2000 『大宰府条坊跡XV』一陶磁器分類編—大宰府市の文化財 第49集 太宰府市教育委員会
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」—型式分類と編年を中心として—『九州歴史資料館研究論集 4』九州歴史資料館
- 渡邊誠 2012 『平安時代貿易管理制度史の研究』思文閣出版

表 1 出土地点一覧表

青白磁

条坊略称	遺構名	報告書掲載番号	掲載報告書
左3210	溝1387・井戸1197	302・344・345	財団法人京都市埋蔵文化財研究所2008『平安京左京三条二坊十町(堀河院)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17
左3407	Sk220	37	平尾政幸2019「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左4102	池452	365	『平安京左京四条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2014-10 埋文研2015
左4214	SX493・SK2276 SK2642	279・39・488・ 層	平尾政幸2003『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-5財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左4307	SK1320	226~238	『平安京左京四条三坊七町・姥柳町遺跡』関西文化財調査会2014
左4312	SK822・SE435・ SE324・SK1390	139・311・312・ 383~388	平尾政幸2007『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-26 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左5305	SD200	95・96	水谷明子『平安京左京五条三坊五町 烏丸綾小路遺跡』古代文化調査会2013
左5309	SE08・Sk370・埋喪	56・288~290・ 349	財団法人京都市埋蔵文化財研究所2008『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-10
左5310	SK51	79	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1980
左5316	SK225	69~72	『平安京左京五条三坊発掘調査報告』関西文化財調査会1998
左5206	SK1456	未	平安京左京五条二坊六町跡・烏丸御池遺跡 報告書作成中
左6205	SD19・SK730	74~77・未	財団法人京都市埋蔵文化財研究所2012「1章25平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本國寺跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』・平尾政幸2019「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左6305	土坑2345	38-59~62	財団法人京都市埋蔵文化財研究所2005『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-8
左6308	SK376	81~83	1章03 平尾政幸『平安京左京六条三坊』『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』・平尾政幸2019「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左6314(烏丸61)	暗茶褐色泥砂層Ⅱ №61)	61-52~76	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1980
左8116	土坑229	60	モンペティ恭代2014『平安京左京八条一坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-16公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左830405	池160-1	284・285	(財)京都市埋蔵文化財研究所2009『平安京左京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-7
左9216	井戸394・地業419	74	『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-9公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2015
左9308	井戸151	51	大西晃晴『平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡発掘調査報告書』文化財サービス発掘調査報告書第12集 株式会社文化財サービス
左9309	SK0406	370	佐藤垂聖ほか2019『平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡』公益財団法人元興寺文化財研究所
右2211	層	12	辻 純一1984「IV右京二条二坊」『平安京跡発掘調査概報』昭和59年度京都市文化市民局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所1984
右3103	SD222/225	2-36・2-39	財団法人京都市埋蔵文化財研究所2002『平安京右京三条一坊三町(右京職)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-3

条坊略称	遺構名	報告書掲載番号	掲載報告書
右6106	SB79	636	平尾政幸1996「平安京右京六条一坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
白河街区①	SX91	83～92, 158～167	新田和央「V白河街区」『平成30年度京都市内遺跡発掘調査報告』京都市文化市民局2019
白河街区②	土壙墓201・土壙墓362	43・258	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2020『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-12
円勝寺①	土坑616	381	近藤奈央ほか『円勝寺・成勝寺・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-17公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2016
円勝寺②	溝2092・溝5140 東岸・溝5135・造成土・柱穴700・土坑895・	157・221・222・226・298・459～461	柏田有香ほか『円勝寺・成勝寺・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-16公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2018
法住寺殿跡	井戸4-250	323～325	『京都国立博物館構内発掘調査報告書』—法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡—京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所2009
寺町旧域	層	27	小椋山一良ほか2018『寺町旧域(妙満寺跡・本能寺跡)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-18 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
弁天島経塚	経塚	1～26	小椋山「49弁天島経塚」『昭和52年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所2011
勝持寺旧境内	層	103・104	南孝雄・辻裕司2012『勝持寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
花背経塚	経外用器内	1	馬瀬智光「V-1 花背経塚群(18A008)」京都市文化市民局 文化芸術都市推進室文化財保護課 2020『京都市内遺跡詳細分布調査報告令和元年度』京都市文化市民局
天目			
左6314 (烏丸線№61)	暗茶褐色泥砂層Ⅱ	69・107	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1980
左8308	SK719	233	平尾政幸2020『平安京左京八条三坊八町跡・東本願寺前古墳群』関西文化財調査会
左9308	溝270	104	大西晃晴『平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡発掘調査報告書』文化財サービス発掘調査報告書第12集 株式会社文化財サービス
左5316	SK225	69～72	『平安京左京五条三坊発掘調査報告』関西文化財調査会1998
左5309	埋糞	350	財団法人京都市埋蔵文化財研究所2008『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-10
左4214	層	66	平尾政幸2003『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概要2003-5財団法人京都市埋蔵文化財研究所
黄釉盤・緑釉盤			
左3210	土坑1247・井戸1197	223・343	財団法人京都市埋蔵文化財研究所2008『平安京左京三条二坊十町(堀河院)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17
左4312	SE435	309・310	平尾政幸2007『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-26 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左4402	地下室410	258・259	東洋一ほか2009『平安京左京四条四坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-12財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左5211	地下室2123	148	近藤章子2017『平安京左京五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-8公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左5316	SK225	69～72	『平安京左京五条三坊発掘調査報告』関西文化財調査会1998
左6314 (烏丸線№61)	暗茶褐色泥砂層Ⅱ	78・79	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1980
左8116	土坑229	63	モンベティ恭代2014『平安京左京八条一坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-16公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左830405	土坑137	147	(財)京都市埋蔵文化財研究所2009『平安京左京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-7
左9216	地業419	190	『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-9公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2015
左9308	池57	28・29	『平安京左京九条三坊八町 烏丸町遺跡』—室町の調査— 古代文化調査会2019 小松武彦
左9309	SE0590・SK0406	272・370	佐藤聖聖ほか2019『平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡』公益財団法人元興寺文化財研究所
左9310	層	464	小椋山一良ほか『平安京左京九条三坊十町跡・烏丸町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-15公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
白河街区①	SX91	89・90・230	新田和央「V白河街区」『平成30年度京都市内遺跡発掘調査報告』京都市文化市民局2019
白河街区③	土坑33	227	近藤奈央2012『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
円勝寺①	溝840・pit413	442・463	近藤奈央ほか『円勝寺・成勝寺・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-17公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2016

赤松 佳奈 『京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景 (2-2)』

条坊略称	遺構名	報告書掲載番号	掲載報告書
円勝寺②	溝2090・溝2092・ 溝5140	447～451	柏田有香ほか『円勝寺・成勝寺・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-16公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2018
上京遺跡	土坑268	19～31	小松武彦2011『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
相国寺 旧境内		65	東洋一ほか2005『相国寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2004-14財団法人京都市埋蔵文化財研究所
壺			
左4402	地下室410	257	東洋一ほか2009『平安京左京四条四坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-12財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左5316	土壙墓157	220	高橋潔2013『平安京左京五条三坊十六町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-21 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左6209	土坑2892	551	『左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018-10公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2019
左830405	土坑137	148	(財)京都市埋蔵文化財研究所2009『平安京左京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-7
左8307	SD24	299	吉川義彦ほか1982『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左8402	SE155	未報告	21H471R4年度発掘 報告書作成中
左9309	層	115・116	佐藤垂聖ほか2019『平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡』公益財団法人元興寺文化財研究所
左9310	層	464	小嶋山一良ほか『平安京左京九条三坊十町跡・烏丸町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-15公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
右北辺308	SE65	8	津々池惣一『平安京右京北辺三坊八町(宇多院)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-2財団法人京都市埋蔵文化財研究所
長岡右1415	土器溜3007・土坑 2078	56・57・122～ 124	南孝雄ほか2005『長岡京右京一条四坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-15財団法人京都市埋蔵文化財研究所
円勝寺①	溝840・造成土	443・462	近藤奈央ほか『円勝寺・成勝寺・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-17公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2016
円勝寺②	溝5140・溝5135	239・259	柏田有香ほか『円勝寺・成勝寺・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-16公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2018
法住寺殿跡	層	226	『法住寺殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-10財団法人京都市埋蔵文化財研究所2013
上京遺跡	土坑268	22～27	小松武彦2011『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
白河街区①	SX91	172	新田和央「V白河街区」『平成30年度京都市内遺跡発掘調査報告』京都市文化市民局2019
化野	火葬墓 ¹³	205	加納敬二ほか1997『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊財団法人京都市埋蔵文化財研究所

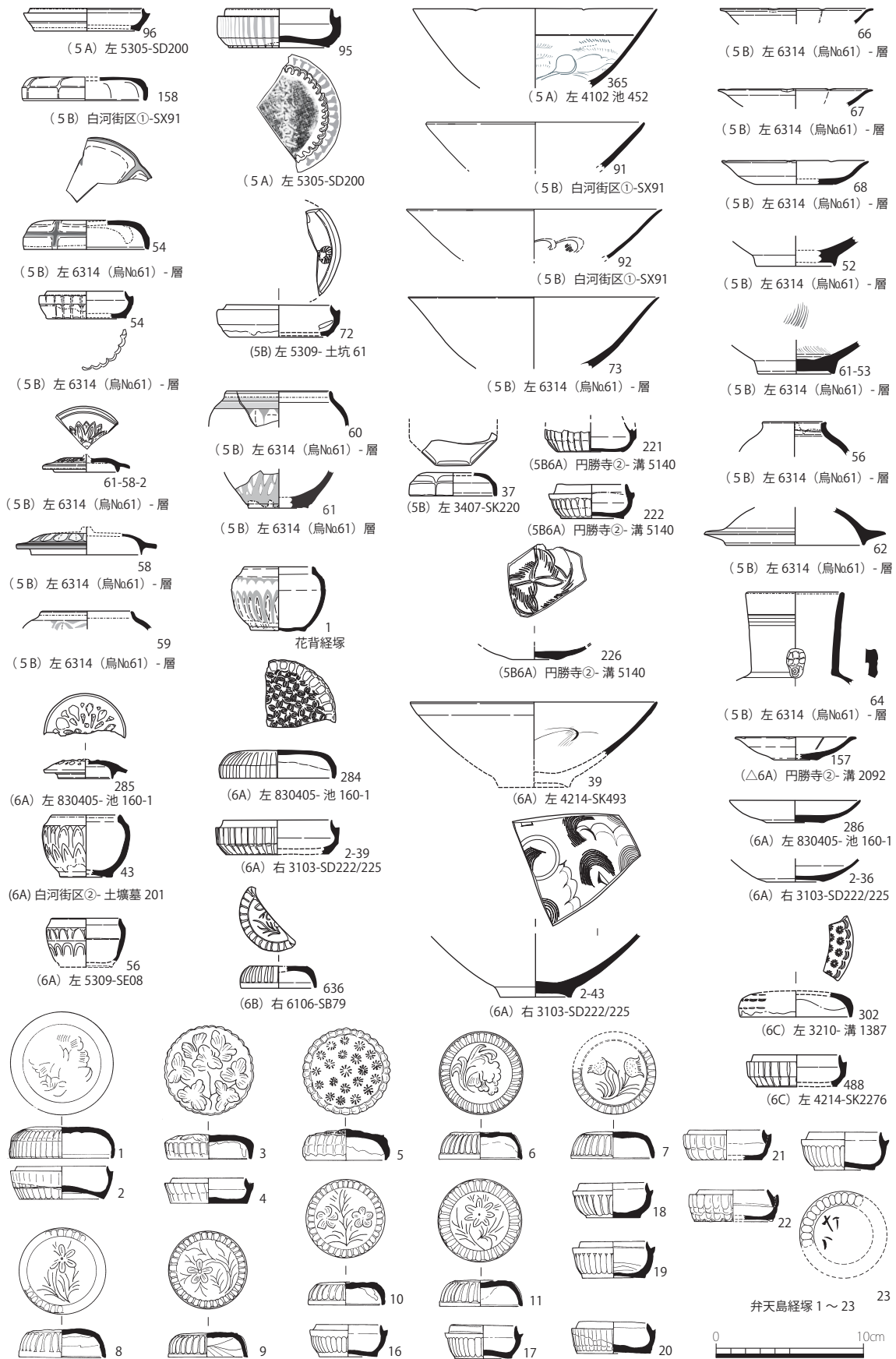
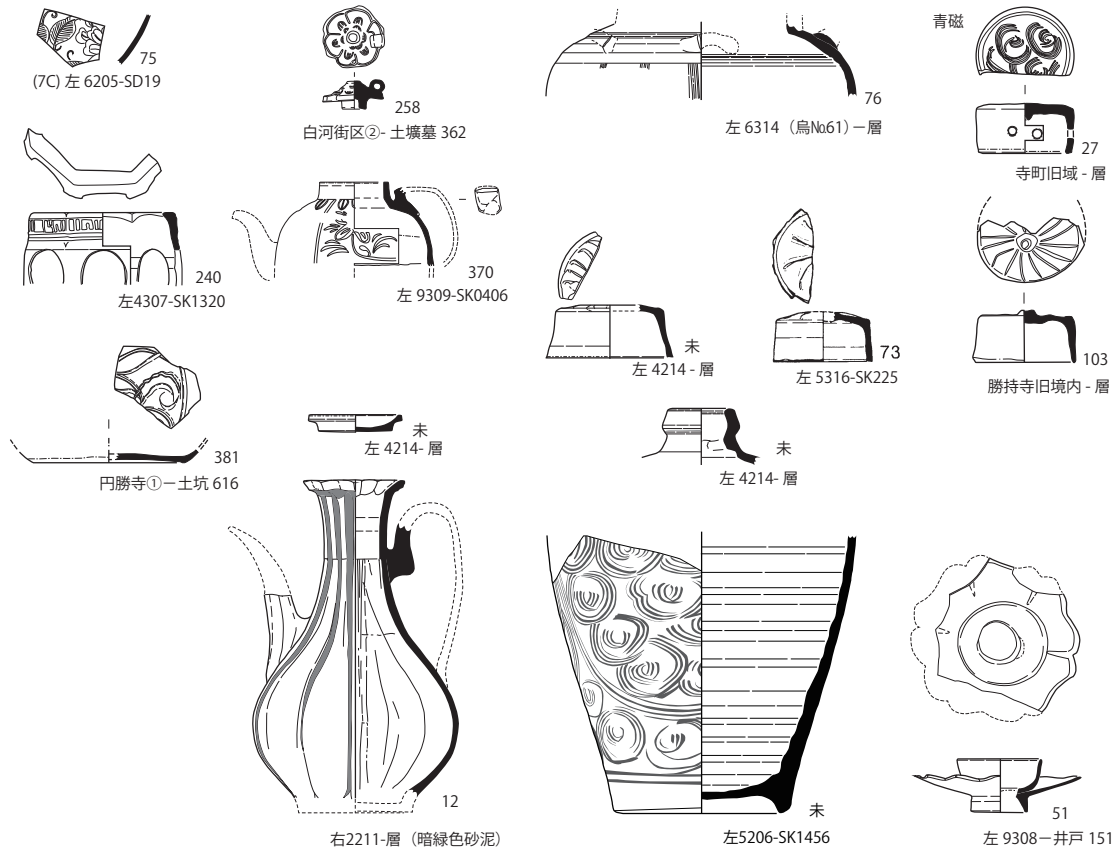


図10 出土遺物 青白磁 (1)



図11 出土遺物 青白磁 (2)



黒釉・褐釉陶器 (天目椀)

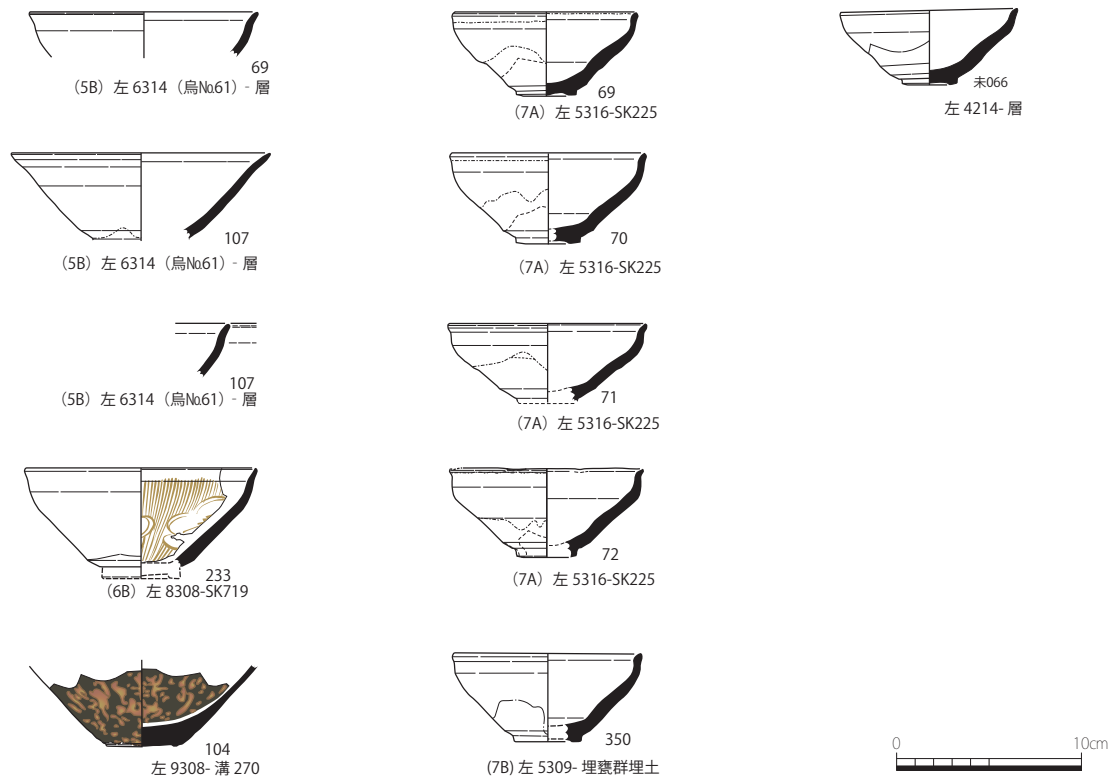


図12 出土遺物 青白磁 (3)・黒・褐釉陶器

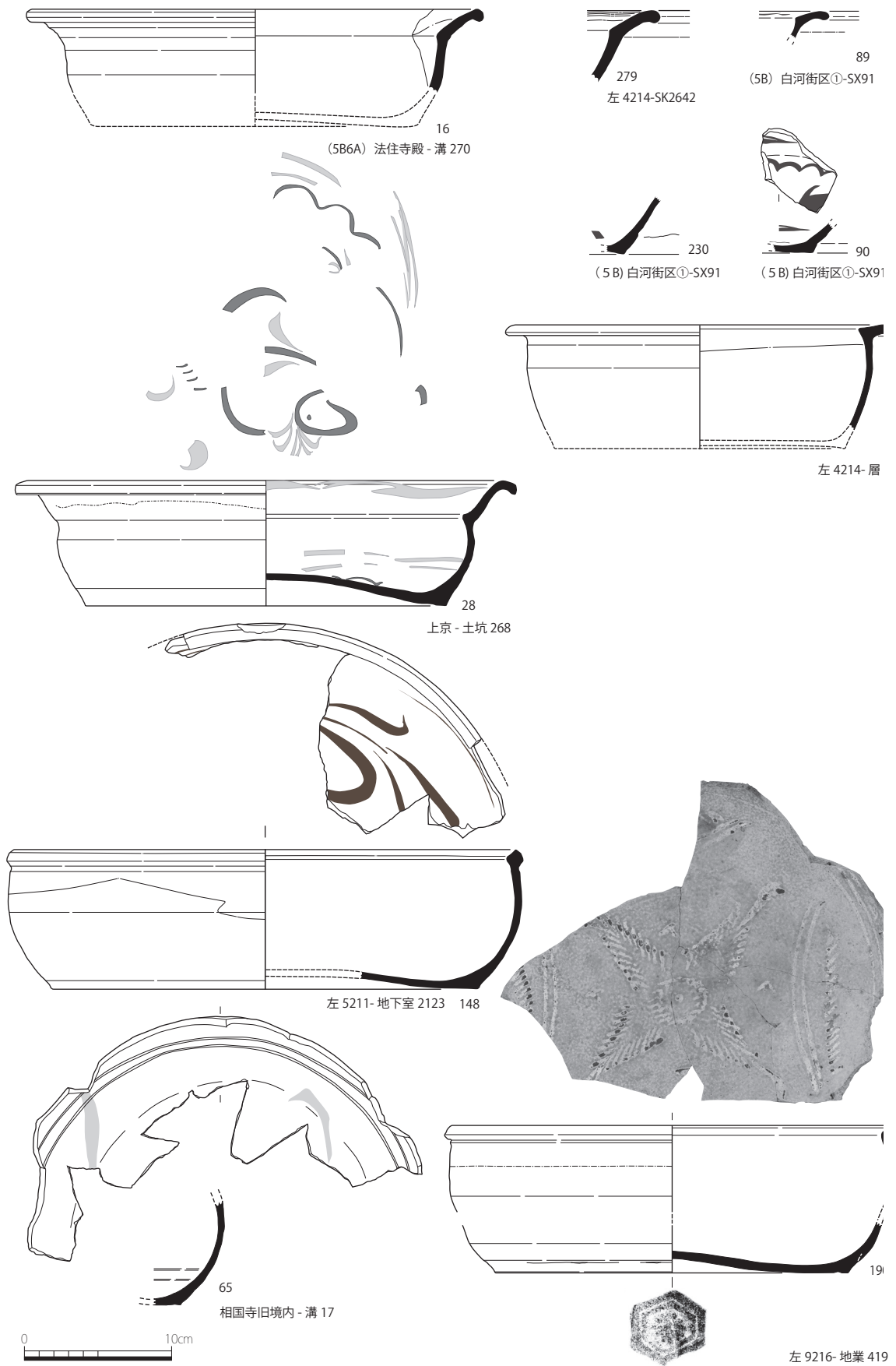


図13 出土遺物 黄釉盤 (1)

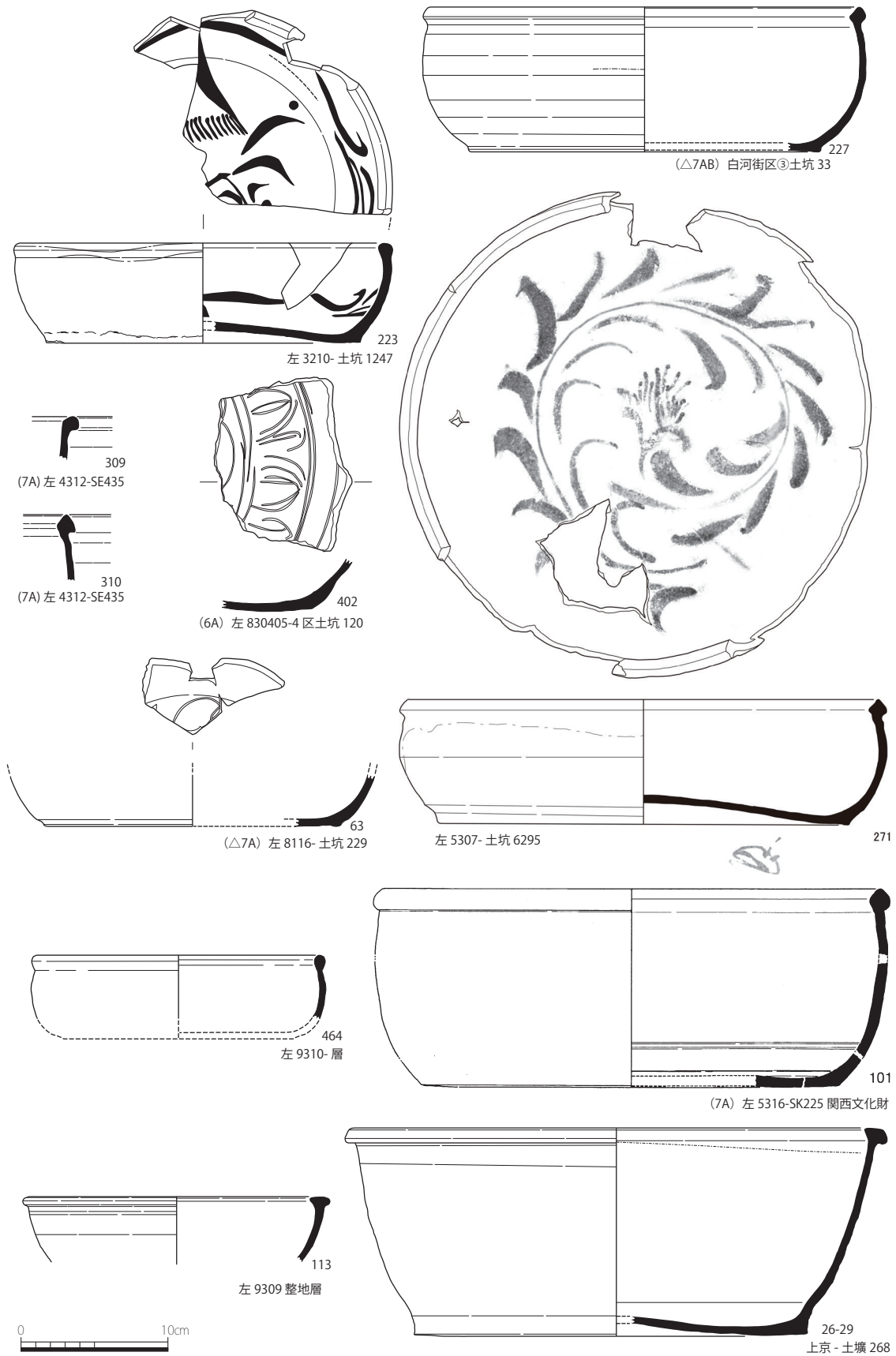
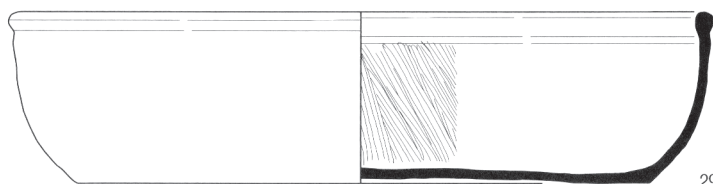
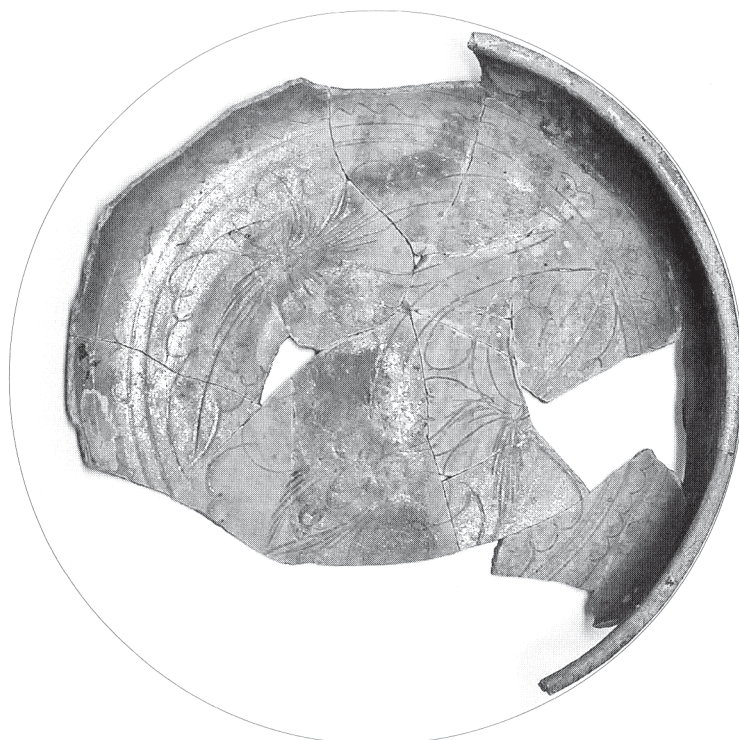


図14 出土遺物 黄釉盤 (2)・黄釉陶器



左 3908-池 57



図15 出土遺物 緑釉盤 (1)

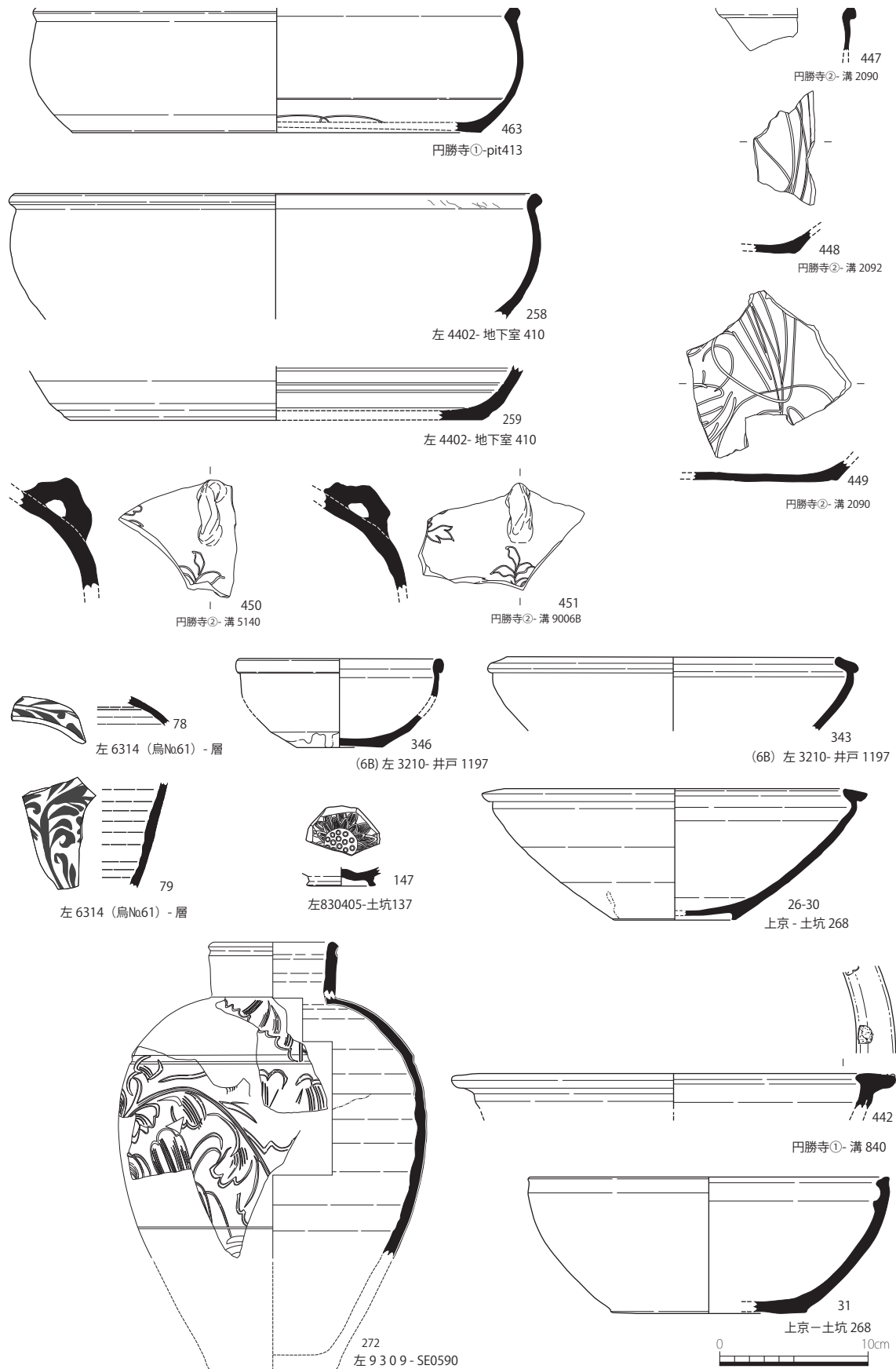


図16 出土遺物 緑釉盤 (2)・その他陶器類

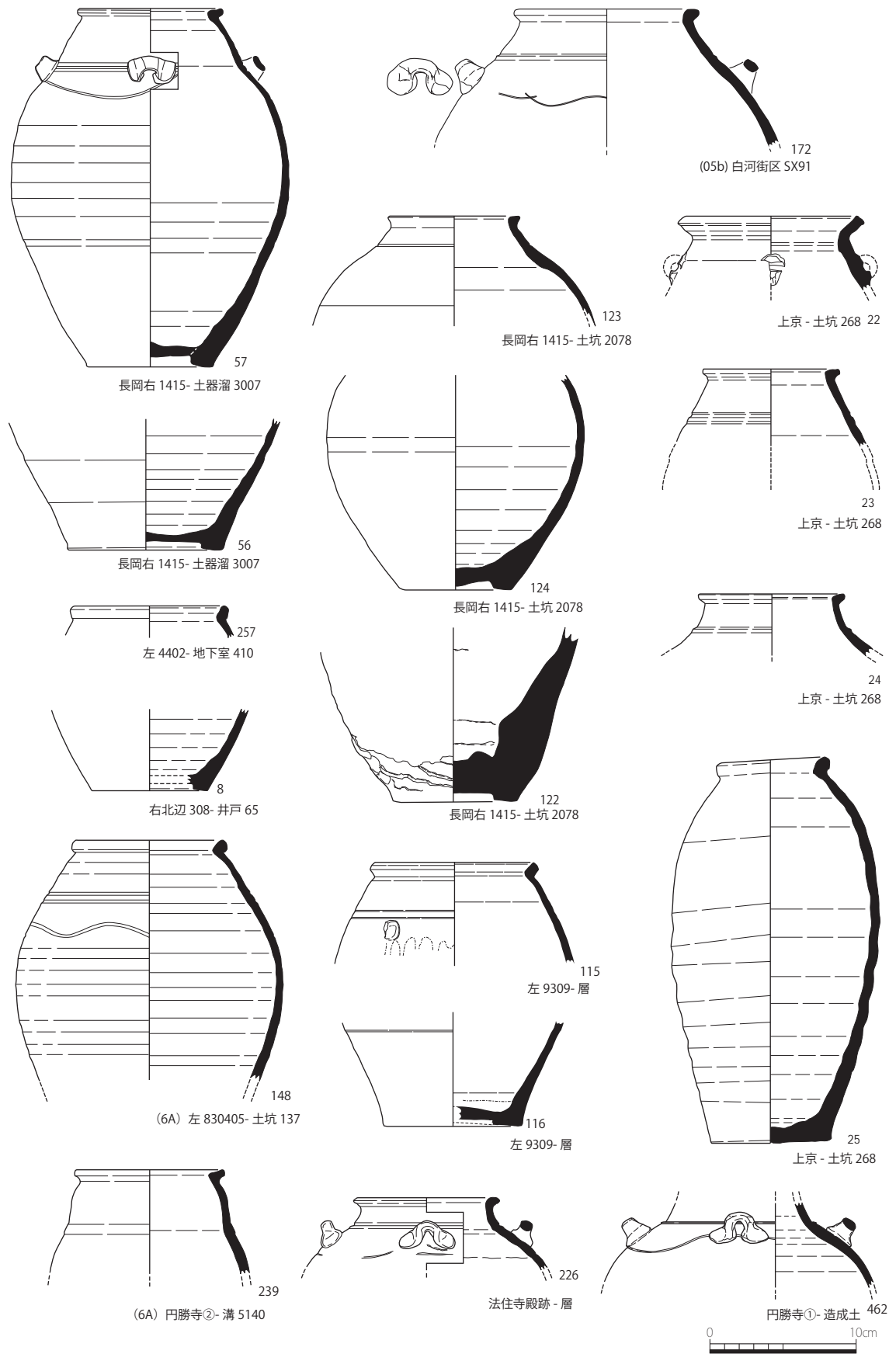


図17 出土遺物 雑器壺 (1)

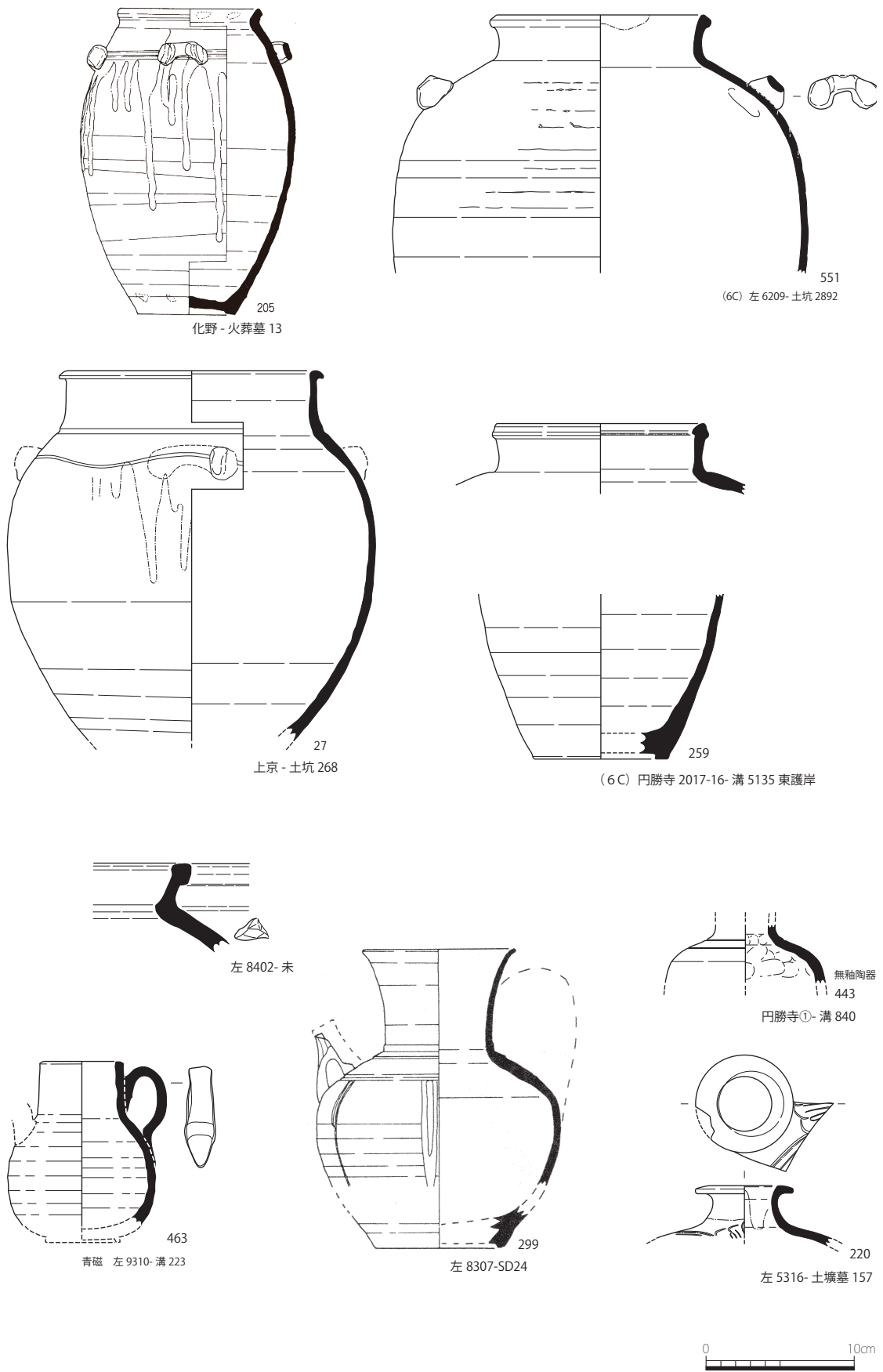


図18 出土遺物 雑器壺 (2)